山梨県立博物館　常設展拡大展示　かいじあむ＋　展示解説リーフレット【テキスト版】

展示解説の前に本展の概要の説明と、当館館長守屋正彦よりごあいさつを申し上げます。

概要

・　会場　山梨県立博物館　企画展示室
・　開催期間　令和 2 年 6 月 17 日（水）から同年 9 月 7 日（月）まで
・　観覧料　一般 520 円（420 円）、大学生 220 円（170 円）
　※　カッコ内は宿泊・団体の割引料金。
　※　7 月 1 日（水）から 8 月 31 日（月）まで静岡・山梨県民は半額（一般 260 円、大学生 110 円）。
　※　小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童・生徒は無料。
　※　65 歳以上のかたは無料。
　※　障害者とその介護をされるかたは無料。
　※　無料、免除の対象となるかたは、証明となるものをご提示ください。

館長あいさつ

ご観覧のみなさまへ

　このたびは山梨県立博物館にご来館いただき、誠にありがとうございます。

　現在、世界中を新型コロナウィルスの感染の脅威が覆い、その終息への道のりは未だ見通せないなかではありますが、多くの医療従事者の皆さまをはじめ、人々の健康と命を守るために尽力されている方々に対して、心から感謝の意を表したいと思います。

　山梨県立博物館におきましては、約３ヶ月の臨時休館を余儀なくされましたが、いわゆる「三密」の回避などの感染リスク対策を実施したうえで、再び館の扉を開くことができました。お迎えする設備もスタッフも、利用する皆さまとの交流は最小限とせざるを得ないなかではありますが、このような時に博物館だからこそ出来ることを準備し、未曾有の危機を乗り越えるための、精神的な糧をご用意していきたいと思います。

　従来の常設展示につきましては、利用者の皆様に五感をもって楽しめる工夫をご用意しており、それが当館の特徴でもありましたが、感染防止の観点から、一部の展示の使用を控えることとしております。

　そこで、利用者の皆さまに山梨の豊かな歴史や文化への理解を深めていただくために、「かいじあむ＋」と題して、日ごろの常設展示を拡大してご紹介することといたしました。いつもの県立博物館とは少し違う切り口や、これまでお目に掛ける機会が少なかった歴史資料や美術作品などを通じて、この山梨の歴史や文化を楽しんでいただきたいと考えております。

　いま、私たちが直面している危機は、まだどのように終わりを迎えるのかはわかりません。しかし、これは長い歴史のなかで、先人たちもまた幾度も向き合い、乗り越えて来た試練だともいえます。本展を通じて、私たちがこの危機を乗り越えるための知恵や、支え合って耐え抜いていくための勇気を得ていた

だければ幸いです。

令和２年６月
山梨県立博物館
館長　守屋　正彦

凡例

・ 本書は令和２年（2020 年）６月 17 日（水）から同年９月７日（月）まで開催の常設拡大展示「かいじあむ＋（ぷらす）」の展示解説リーフレットです。
・ 本書の執筆・編集分担は次のとおりです。

導入展示	御坂のニホンオオカミ	担当　山田英佑
その①	いのちの歴史との対話	担当　山田
その②	文化のはじまり	担当　海老沼真治
その③	山梨の宝　甲州文庫	担当　小畑茂雄
その④	絵画から見えてくるもの	担当　松田美沙子
その⑤	エア甲州道中旅行	担当　海老沼
その⑥	近世甲斐国の書蹟	担当　中野賢治
その⑦	山梨流　災いの防ぎ方	担当　丸尾依子
その⑧	危機のなかの山梨	担当　小畑
その⑨	毎日に微笑みを	担当　近藤暁子

※いずれも当館学芸員

・ 本書には展示品のすべての解説を収録していますが、資料写真は一部のみ掲載しております。
・ 掲載している資料は、特に注記のないものは山梨県立博物館所蔵資料です。
・ 資料の翻刻文については、適宜句読点等を付したほか、人名および地名を除いて表記を当用漢字で統一しております。

では、最初の展示資料を見てみましょう。緑濃い森の背景を背負ったあんどん型ケースをご覧ください。

導入展示　御坂のニホンオオカミ

ニホンオオカミは、明治時代の終わりごろ、生物学的な調査がされる前に絶滅したため、生きていた時の正確な姿すら、よくわかっていません。剥製は全世界に数点しかなく、本種を定義する基準となった標本（「タイプ標本」といいます）は、なんと日本ではなくオランダの国立自然史博物館が所有しています。これは、江戸時代に来日したドイツの医師・シーボルトが標本として収集したものです。

一方、今回展示中の資料は、山梨県内の個人宅で代々保管されていたもので、関東の山間地域でみられた憑きもの落としの信仰と関係があると言われています。この２点の標本に対する取り扱い方の違いには、自然界のモノを全て記録しようとした西洋と、モノを通した精神的つながりを大切にしてきた日本の、自然に対する付き合い方の違いが表れているようにも思えます。

ニホンオオカミの例に限らず、日本が持つタイプ標本の質・量は、経済先進国のなかで自慢できるものではありません。一方で日本人は、新技術を取り入れつつ、コツコツと成果を積み上げていくことに定評があります。当館の資料は特に状態が良く、今後、ニホンオオカミの謎を解き明かすうえで大きな役割を果たすことになるでしょう。

資料の詳細な情報です。資料のひとコト説明、資料名、時代、解説文の順序にご説明します。

・ 資料のひとコト説明　かつては御坂の山々にもオオカミが棲んでいたのでしょうか。

資料名　ニホンオオカミ頭骨
時代　江戸時代か
解説　ニホンオオカミは、日本の本州、四国、九州に生息していたオオカミである。この資料は、県内の個人宅にて代々保管されていたもので、子供の夜泣きを鎮めるために使われていたという。保存状態は良好で、鼻を中心に皮、肉などの軟部組織が部分的に乾燥して残っている。このような例は極めて珍しく、ニホンオオカミの来歴を分子生物学的に解明するうえでも重要な資料である。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその①　いのちの物語との対話　山梨県立博物館の自然史資料

山梨県立博物館では、太古の時代から現代まで、時代や種類にとらわれることなく、自然界に存在する資料を幅広く収集しています。ここでは、最近になって博物館に収められた資料をご紹介します。

自然史資料は「いのちの歴史」の証拠となるものであり、博物館は、それらを永久に保存し、将来にわたって多くの人が利用、活用できるようにしていく役割をもっています。一方で、自然史資料の多くはナマモノなので、そのまま放っておけば分解したり、壊れたりして、失われてしまいます。そこで大事にな

るのが標本づくりです。たとえば、鳥や獣の遺体は多くの場合、骨格標本や剥製標本にして保存します。頑丈にみえる化石資料も、修復や補強、あるいはレプリカ制作が必要になることは珍しくありません。また、様々な状態のナマモノを目の前にしての標本づくりは、往々にして時間との戦いになることが多く、その仕上がりには作り手の経験とセンスがはっきりと出ます。これが自然史資料の難しいところであり、おもしろいところでもあります。

　机に向かって勉強するよりも、外で遊んだり工作したりするのが好きな人は、ひょっとすると自然史系の学芸員に向いているかもしれませんね。

では、このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　この本剥製は、ホームセンターなどで手に入る材料を使って製作しました。

資料名　フクロウ本剥製
時代　現代
解説　フクロウは、ユーラシア大陸北部に広く生息し、日本では九州から北海道にかけて分布する。その特徴的な風貌から、森の賢者や学問の神様、さらには「福」を招く縁起の良い鳥として愛されてきた。夜間に活動し、音をほとんど立てずに飛行できるため、人目に付くことは少ないが、人里近くの森林にも生息している。当館の敷地内でも、その姿が確認されている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　山梨の未来を拓くリニア工事で発見！太古の山梨には海岸がありました。
資料名　リニア高川トンネル産出 新第三紀化石　山梨県指定文化財
時代　新第三紀中新世後期（約 700 万年前）
解説　山梨県大月市初狩町から産出した、新第三紀中新世後期（約 700 万年前）のものと推定される化石群。トンネル内深部から産出されたため、地表面で発見された化石とは異なり、物理

的・化学的な風化作用の影響をほとんど受けておらず、極めて良好な保存状態をほこる。この化石群は、おもに潮間帯（潮の満ち引きがおこる場所）に生息する軟体動物からなり、当時の古環境、古地理などを解明するうえでも重要である。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその②　文化のはじまり　館蔵考古関係資料から

山梨県は縄文時代の遺跡が多く、特に今から約 5000 年前の縄文時代中期については、多彩な造形の土器や土偶などが見つかっており、全国的にも豊かな縄文文化が展開した「縄文王国」でありました。こうした文化は長野県にも共通し、両県にまたがる縄文時代の遺跡群は「星降る中部高地の縄文世界」として日本遺産にも認定されています。縄文遺跡や遺物は、この地における人々の文化が大きく華開いた「はじまり」を物語る貴重な文化財なのです。

また約 1700 年前の古墳時代の遺跡としては、甲斐銚子塚古墳など全国有数の規模を有する古墳があり、注目を集めています。古墳は早くから人々の目に止まり、地域の人々によって調査が行われることもありました。

山梨の県立施設では、考古資料の専門施設として山梨県立考古博物館がありますが、当館でも、県内の郷土研究者が調査・収集した資料や、遺跡・遺物に関する歴史資料などを収蔵しています。なかには、本県における考古学など学術研究の「はじまり」としての意義をもつものもあります。今回はそれらのなかから、縄文時代の資料、古墳時代の資料、平安時代の資料を紹介いたします。いずれも当時の人々の営みを知るうえで、また山梨の郷土研究の歴史をたどるうえでも、大変貴重な資料です。

このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　戦後の食糧不足のため神社周辺を開墾した際に、たくさんの土器片が見つかったそうです。

資料名　深鉢型土器、釣手土器　宮ノ前（七日子　ななひこ）遺跡

時代　縄文時代中期

解説　宮ノ前（七日子）遺跡は山梨市七日市場の七日子神社付近に所在する遺跡で、戦後間もない昭和 21 年から 23 年（西暦 1946 年から 48 年）に、野沢昌康・上野晴朗・古屋善博氏ら郷土史研究家によって調査が行われ、県内でも初期の調査事例となった。土器は縄文時代中期の曽利式と呼ばれる形式が中心で、釣手土器は山梨・長野が分布の中心のひとつとなっている特徴的な土器である。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　釈迦堂遺跡に代表されるように、甲府盆地東部は土偶の多い地域のひとつです。

資料名　土偶　宮ノ前（七日子）遺跡・立石遺跡

時代　縄文時代中期

解説　土偶は縄文時代の人々の精神世界を表した遺物であり、その多くは女性を象ったものと考えられている。縄文時代中期の土偶は、ほとんどがバラバラに壊された状態で出土するが、宮ノ前（七日子）遺跡、立石遺跡の土偶は、頭部以外はほとんど欠損していないものがあり、注目される。

ここで、「かいじあむ＋のポイント！」、「甲斐国「ご当地土器」のはじまり　―甲斐型土器―」について解説します。

・　「甲斐型土器」って？

山梨県内で奈良・平安時代の遺跡を発掘調査すると、必ずといって良いほどに出土する素焼きの土器（土師器　はじき）があります。坏形（つきがた）のものは、直径は 10 センチメートル、高さ 5 センチメートル程度の大きさで赤茶色をしており、内側に暗文（あんもん）と呼ばれる放射線状の文様（もんよう）を伴うなどの特徴を持った土器です。甲斐国内で独自に生産された特色ある土器ということで、現在では「甲斐型土器」と呼ばれ、特に上記のような形の坏が大量に発見されています。

・　研究の出発点

郷土史研究家の上野晴朗（うえのはるお）氏は、昭和 21 年から 23 年（西暦 1946 年から 1948 年）に調査した宮ノ前（七日子　ななひこ）遺跡でこの土器を発見し、翌年から調査が始まった近隣の日下部遺跡でも同様の土器が大量に出土したことから、これらの土器を「日下部式」と命名し、地域独自の特徴をもつ土器であると評価しました。当時はまだ、奈良・平安時代の地方出土の土器について本格的な検討が行われることはほとんどありませんでした。「日下部式」は後に「甲斐型」と名付けられますが、両遺跡

は、甲斐国の「ご当地土器」ともいえる甲斐型土器に着目した遺跡調査の「はじまり」として、甲斐国の奈良・平安時代土器研究の出発点となったのです。

もうひとつ、「かいじあむ＋のポイント！」、土偶が展示されているケースの隣につるされた細長い地図のようなものについて解説します。

　これは「懐宝甲斐国絵図（かいほうかいのくにえず）」という江戸時代の山梨県地図ともいうべきものを展示室内の装飾として製作したもので、江戸時代のやまなしを探検するかのような楽しい地図です。書き込まれているのは江戸時代の村々の名前で、江戸時代の終わりごろで約 800 の村がありました。その後、明治初期の大合併によって 280 あまりに整理され、「昭和の大合併」では 64 の市町村になります。昭和生まれの方には馴染みの深い自治体名です。「平成の大合併」によって、現在山梨県の市町村数は 27 になりますが、概ね、現在の大字に相当する区域が江戸時代の村だったので、この地図に描かれた村の名前は、現在の人々にもなじみ深いものと言えます。次のコーナー「山梨の宝　甲州文庫」にこの地図の実物が展示されていますので、ぜひご自身のお住まいをさがしてみましょう。
　また、この地図は、当館ホームページの「おたのしみ資料」コーナーで高精細画像をお楽しみいただけますので、ご自宅にインターネット環境があるかたは、セキュリティにご注意のうえ、ぜひお試しください。ご利用は、使用するソフトの関係で、今年いっぱいまでとなっております。

では、次の資料です。

・　資料のひとコト説明　鏡の実物は現在確認できませんので、この拓本が貴重な資料となっています。
　　資料名　八代郡岡村銚子塚出土大鏡拓本　甲州文庫
　　時代　江戸時代（18 世紀）
　　解説　明和年間（西暦 1764 年から 72 年まで）に岡銚子塚古墳（笛吹市）から掘り出された銅鏡 2 点の拓本。他に剣や太刀、勾玉なども発見されたという。このうち右側（本書図版では上側）の鼉龍鏡（だりゅうきょう）は、甲斐銚子塚古墳（甲府市）でも出土しており、両古墳の関係が注目される。江戸時代の甲斐の国学者・萩原元克（はぎわらもとえ　生年 1749 年　没年 1805 年）の旧蔵品と伝わっている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　団栗塚は八代町域でも特に古い古墳と考えられています。
　　資料名　東八代郡八代村奴白の古墳発見記録　檜峰神社武藤家文書
　　時代　明治 22 年（西暦 1889 年）
　　解説　明治時代における古墳発見の記録。八代村（笛吹市）で地元の人が「ズンクリ塚（団栗塚）」と呼ぶ古墳があり、道路工事のため古墳の土を掘ったところ、内部を朱で着色した石室が発見され、そのなかから白骨や鏡、剣などが見つかったという。古墳は前方後円墳と推定され、出土した鏡は南北八代熊野神社が所蔵している（県指定文化財）。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　周辺には「千塚」という地名が残り、古墳が多い地域だったことがわかります。

資料名　埴輪　加牟那塚（かむなづか）古墳

時代　古墳時代（6 世紀）

解説　加牟那塚古墳（甲府市）は山梨県における古墳時代後期の代表的な古墳で、石室は姥塚（うばづか）古墳（笛吹市）に次いで県内第 2 位の規模を誇る長大なものとして知られる。山梨県内では埴輪を持つ古墳は少なく、6 世紀代の古墳では、現時点では加牟那塚を含む 5 例が知られる程度である。埴輪は円筒形のほか形象埴輪（武具などの器財、家形、人物など）があり、朱で着色されたものもある。

次のケースに移動しましょう。

・　資料のひとコト説明　日下部遺跡は、現在の山梨市立山梨北中学校の敷地にあたります。

資料名　甲斐型土器　坏　宮ノ前（七日子）遺跡

時代　平安時代（9 世紀）

解説　甲斐型土器は現在の甲府市東部を中心に生産された土器で、甲斐国が主導して生産し、甲斐国内をはじめ近隣諸国に広く流通した。宮ノ前（七日子）遺跡のものは初期の発掘事例であり、近隣でほぼ同時期に発掘調査が行われた日下部遺跡からも多量の同型土器が出土し、甲斐国独自の形式を持つ土器として注目された。また両遺跡周辺は、古代山梨郡加美郷（かみごう）の中心地と推定されている。

次の資料です。

・資料のひとコト説明　大坪遺跡周辺は古代甲斐国府にも近く、重要施設が集まっていたと推定されます。

資料名　甲斐型土器　皿　旧甲運村（甲府市）出土

時代　平安時代（9 世紀）

解説　甲運村（こううんむら　甲府市横根町・桜井町・和戸町・川田町）で出土した甲斐型土器の皿。出土地の詳細は記録されていないが、同様の皿は大坪遺跡（甲府市横根町）で大量に出土している。大坪遺跡は甲斐型土器の生産拠点と考えられており、関連が注目される。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　甲府盆地で生産された土器が、峠を越えて河口湖周辺にもたらされたものです。

資料名　「布ヵ」墨書土器　旧長浜村（富士河口湖町）室沢出土

時代　平安時代（10 世紀）

解説　長浜村室沢（富士河口湖町長浜）で発見されたとの記録をもつ甲斐型土器で、「布」とみられる墨書がある。河口湖周辺では滝沢遺跡や大石遺跡（ともに富士河口湖町）など、近年の発掘調査で甲斐型土器を多数出土する遺跡が確認されており、この土器もそれらと関連する可能性がある。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその③　山梨の宝　甲州文庫

いまからおよそ 70 年前、郷土の歴史資料の宝庫そのものといえる「甲州文庫」が山梨県にやってきました。

「甲州文庫」は南アルプス市出身の功刀亀内氏が収集したもので、山梨県の社会・文学・政治・経済・人物など、あらゆるジャンルの歴史を知ることができる資料約 2 万点からなる資料群です。山梨県は戦争中の甲府空襲によって、千名以上の人命とともに、江戸時代以来積み重ねて来た多くの文化遺産を失っています。戦後まもなく功刀氏より譲渡を受けた甲州文庫は、失われてしまった山梨県の人々の地域らしさや心の拠り所を補ってくれた、まさに重要な「宝物」となったのです。

山梨県立博物館では、開館以来、常設展示や企画展、シンボル展などにおいて、「甲州文庫」を活用し、山梨県の豊かな歴史をお伝えしてまいりました。今回は改めて「甲州文庫」の重要性をご紹介するとともに、これまであまりお目にかけてこなかった資料をご紹介する機会とさせていただきました。常設展示室パート①（従来の展示室）では、どれが「甲州文庫」かな？、と探しながらご鑑賞いただくのも楽しいかもしれませんね。

このコーナー最初の資料は。先ほどの「かいじあむ＋のポイント！」でも紹介した「懐宝甲斐国絵図」です。

・　資料のひとコト説明　甲州の約 800 の村々がびっちりと！

資料名　懐宝甲斐国絵図　甲州文庫

時代　天保 13 年（西暦 1842 年）

解説　甲斐国全域を描いた地図。各村は当時の 4 郡（山梨・巨摩・八代・都留）ごとに色分けされ、赤い実線で道筋が示されている。道筋には関所や宿駅が記されているほか、古跡や温泉、寺社なども書き込まれており、当時の甲州を旅するうえでの必携地図と言えそうである。発行元は甲府八日町の藤屋（内藤）伝右衛門で、のちに「峡中新聞」を発行する伝右衛門の先代か。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「富の札売りと富突きのようす」について解説します。

・　現代の宝くじ？

「富仕法書」（甲州文庫）によると、文政 12 年（西暦 1829 年）の表門（うわと）神社（市川三郷町）のケースでは、販売される札数は 1 万 5 千枚、それぞれの札には「地」・「福」・「円（圓）」・「満」・「楽」

の文字と数字の組み合わせが書かれていました。代金の札料は銀３匁７分５厘でした。

・　ドキドキの富突き

　気になる当選した場合のことですが、突き順の第１・２・３番にそれぞれ宝金 30・20・10 両、５や 10 の倍数の番にも５・３両、50 番目には 50 両、突留（つきどめ　最終抽籤）となる 100 番目には 90 両が渡されました。またそれぞれの「当選」番の前後には、「両袖」という若干の前後賞も渡されています。

タテ長のケースのなかに長いキリと木札が見えます。

資料のひとコト説明　最後の 100 回目に突かれた札が一等賞高額当選になりまーす！

資料名　富突き錐・木札　甲州文庫

時代　江戸時代

解説　富籤の抽選に使用された道具一式。富籤は現在の宝くじに相当するもので、寺社の普請（修理）資金調達などのためにおこなわれた。番号が記された富札が販売されて、抽籤日には番号を書いた木札を箱に入れ、これを錐で突いて各種褒美金の当選を決めることから、「富突き」とも呼ばれた。

続いて「かいじあむ＋のポイント！」、「モダンボーイの古文書収集　甲州文庫主 功刀亀内（くぬぎ　きない)」について解説します。

・　オートバイを乗りまわす「モボ」

「モボ」とは「モダンボーイ」の略で、大正時代ごろの流行に敏感な男子のこと。女子の場合は「モガ（モダンガール)」。と言います。甲州文庫を蒐集した功刀亀内（くぬぎ　きない　1889 年生まれ　1957 年死去）は、中巨摩郡豊村（南アルプス市）に生まれ、青年時代には甲府で最初にオートバイを購入して、山梨から長野にかけて乗りまわしていたと回顧するほど、新しいものを好む人物でした。そのような若者だった功刀（くぬぎ）は、「他人がお金を欲しがるのと同じ気持ちで資料を欲しがる」と評されるほどの、古文書など「古い」資料集めの第一人者へと変貌をとげていくことになります。

・　古紙漁りが「病みつき」に

功刀（くぬぎ）が「古いもの好き」に転向するきっかけになったのは、甲州財閥の若尾家が進めていた「山梨県志」編纂事業でした。飛脚のことを知りたいと思った功刀は、専門家がいる県志編纂会を訪ねたところ、郷土史家の土屋夏堂（つちやかどう）から、「古い資料は集める人がいないと潰されてしまう」と聞きます。それならば私がやってみようと思い立ち、処分される古紙漁りをしてみると、貴重な資料が次々と見つけ出せるではありませんか。次第にこの古物調査が「病みつき」となり、その道の第一人者への第一歩となったのでした。

大きなケースのなかの左よりに掛けられている人物写真にご注目ください。

・　資料のひとコト説明　和装の元「モダンボーイ」

資料名　功刀亀内（くぬぎきない）肖像写真　甲州文庫

時代　昭和時代か

解説　甲州文庫の収集者である功刀亀内（くぬぎきない）の肖像写真。40 代にさしかかる昭和初期にすでにちょび髭スタイルとなっており、撮影年代は不明。

功刀（くぬぎ）の写真の上にある額をご覧ください。

・　資料のひとコト説明　きっとどこかで見たことがあるはずのフォントです。

資料名　甲州文庫扁額　甲州文庫

時代　昭和 5 年（西暦 1930 年）

作者　中村不折（ふせつ）筆

解説　中村不折揮毫による扁額。裏面には「昭和五年七月刻」と彫られている。中村は「新宿　中村屋」や清酒「眞澄」のロゴや、夏目漱石「吾輩は猫である」の挿絵画家としても知られている。甲州文庫主・功刀亀内による入手の経緯は不明だが、甲州文庫が功刀邸内にあった頃には、資料類がぎっしり詰まった棚にこの扁額が掲げられている写真が遺されている。

ここからは、甲州文庫ならではの資料で自慢の一品です。

・　資料のひとコト説明　昭和 26 年の甲州文庫特別展示会にも「かなばん」から「こなから」まで展示されました。

資料名　甲州枡各種　甲州文庫

時代　江戸時代

解説　古くから甲州（山梨県）でのみ使用されてきた特殊な枡。一般的な京枡と比較して、甲州枡 1 升は京枡 3 升に相当する。甲州枡の一升枡は鉄判（かなばん）と呼ばれ、その 4 分の 1 の容積の端子（はたご）、さらに 2 分の 1 の半（なから）、またさらに 2 分の 1 の小半（こなから）があり、用途に応じて使用された。また、枡の内側と外側とに、職人による焼き印が押されているのも特徴である。

次の資料です。ケース中央のメガネにご注目ください。

・　資料のひとコト説明　山梨＝水晶というイメージも、全国的に根強く広まっています。

資料名　甲斐国水晶眼鏡　甲州文庫

時代　明治 13 年（西暦 1880 年）

解説山梨県産の水晶でレンズが作られた眼鏡。フレームは鼈甲か。山梨県内には大正時代ごろまでは、水晶を産出する山がいくつもあり、原料供給地であることから加工技術も発展し、現在の甲府市を中心とした宝飾研磨産業の礎となった。

次の資料です。ケース手前に開かれた大きい冊子をご覧ください。

・　資料のひとコト説明　私たちの時代の広告は、100 年後、どのように思われるでしょう。

資料名　峡中広告集　甲州文庫

時代　江戸～明治時代

解説　19 世紀（おおむね江戸時代後期から明治時代）の山梨県における広告類をスクラップしたもの。さまざまな広告から、その時代の生活ぶりや新たな文化や流行などがうかがえる。

続いては、甲州文庫の収集や県移管に関する資料です。ケース内左側に集まっています。

・　資料のひとコト説明　69 年前に展示されたものも、今回の会場に展示されています。

資料名　甲州文庫移管関係綴　甲州文庫

時代　昭和 26 年（西暦 1951 年）

解説甲州文庫の県移管に関係する書類や電報、関連記事のスクラップ、写真類などを収めたもの。移管後の昭和 26 年 11 月 1 日から 7 日にかけて、県庁敷地内にあった当時の県立図書館内で開催された「甲州文庫特別展覧会」の目録（出品リスト）の現物も綴じられている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　功刀亀内と甲州文庫が激動の昭和前半をくぐり抜けて来た記録。

資料名　甲州文庫関係記事集帖　甲州文庫

時代　昭和時代

解説　昭和初期から甲州文庫の県移管後にかけての、関係記事や写真、印刷物などのスクラップ帳。昭和 18 年（西暦 1943 年）の甲州文庫が東京から山梨へ疎開したことを報じる記事や、同 24 年の郷土歴史展の開催状況の写真、同 32 年の功刀（くぬぎ）逝去時の会葬礼状などが収録されている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　功刀（くぬぎ）氏は彫り物上手でもありました。「甲州文庫」印も自作かもしれませんね。

資料名　甲州文庫図書目録　甲州文庫

時代　昭和 18 年（西暦 1943 年）・同 26 年（1951 年）

解説　戦時中に功刀亀内（くぬぎきない）自らが作った目録と、昭和 26 年の県移管時の資料の現物との照合用に使用された目録。前者の巻末には、「甲州文庫」の印影数種類が記録されている。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「10 日間で 10 万人　郷土文化の「復興」もたらす」について解説します。

・　会場は松林軒デパート！

戦争の痛手もまだいえぬ昭和 24 年（西暦 1949 年）10 月。甲府空襲後わずかに焼け残った建物のひとつ松林軒デパートを会場に「甲府市制六十周年記念郷土歴史展」が開催されました。この展覧会で功刀亀内（くぬぎきない）出品の「甲州文庫」が大きな評判を呼び、10 日間程度の会期で約 10 万人の入場者を集める大盛況となりました。これほどの人気となったのは、空襲が多くの人命とともに、街そのものと数百年培われてきた文化、そしてその証拠とも根拠ともいえる文化財や歴史資料をも焼き尽くしていたからでしょう。人々は永遠に失われたと思っていた郷土文化の精粋を、「甲州文庫」に再びみつけることができ、釘付けになったのです。この盛況と反響は、「甲州文庫を山梨県へ」という機運につながっていきました。

・　かつての県立図書館で

昭和 26 年（西暦 1951 年）、甲州文庫の功刀氏から山梨県への譲渡が決まり、同年 11 月、当時の県立図書館で特別展示会が開催されました。以来、甲州文庫は山梨県の歴史を語るうえで、なくてはならない資料となりました。来年（令和 3 年）、甲州文庫は山梨県移管 70 周年を迎えます。

展示室には「かいじあむ＋のポイント！」として、「「峡中広告集」に見る江戸・明治頃の山梨の広告」と題した大きな垂れ幕を用意しています。こちらには先ほどご紹介した「峡中広告集」に掲載されたさまざ

まな、おもしろい広告を掲載してあります。「氷水店はじめました。」の新商売、「懐中汁粉」のラベルに「Cake（ケーキ)」と書いてあったり、パン屋さんでは佃煮も販売中、自転車競技大会の目玉は俵担ぎ競争と、不思議な商売や広告を垣間見ることができます。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその④　絵画から見えてくるもの　大木家伝来の襖と浮世絵に見る厄災

山梨県立博物館は「冨嶽三十六景（ふがくさんじゅうろっけい)」を始め多くの絵画資料を収蔵していますが、今回はそのなかでも、見れば見るほど、制作された当時の姿に思いを馳せることのできる作品をご紹介します。

まずは甲府の豪商、大木家の資料のひとつ「高林古翠図（こうりんこすいず)」です。水墨に淡彩で表されたこの襖絵は、大木家で実際に仕切りとして使われていたことから、淡彩部分はわずかに色をとどめるに過ぎません。こうしたちょっとしたところから、長い間使われてきた歴史を感じることができるでしょう。

もうひとつは、厄災関連の浮世絵作品です。新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、その姿を拝めば難を逃れるという「ヨゲンノトリ」などがＳＮＳ上で拡散されていますが、江戸時代も疫病から逃れるため、「疱瘡絵（ほうそうえ)」などさまざま浮世絵が作られました。また地震などの天災が起こった際、特に安政の大地震後に多く世に出された「鯰絵」などの風刺画は、当時の世情を大いに物語っています。襖絵と浮世絵、性格の異なる資料ですが、どちらも往時の生活を垣間見ることができる、貴重な収蔵資料です。じっくりとご覧いただき、ぜひ当時の姿に思いを寄せてみてください。

本コーナーでは、下記の日程で展示替えをおこないますのでご注意ください。
【前期展示】　令和 2 年 6 月 17 日（水）から 7 月 27 日（月）まで
【後期展示】　同年 7 月 29 日（水）から 9 月 7 日（月）まで

このコーナー最初の資料です。この資料のみ前期・後期通じて展示されます。

・　資料のひとコト説明　中丸精十郎　最大の文人画作品　大木コレクション
　　時代　明治 5 年（西暦 1872 年）
　　作者　中丸精十郎作
　　解説　中丸精十郎は甲府生まれの画家で、文人画から洋画に転向した。本作は大木家の襖絵として描いたもので、文人画家時代に号した「金峰」の落款（らっかん）と、書き込みから明治 5 年の春に作成されたことが確認される。仕切りとして大木家で使用されてきたことから、淡彩で表された部分は色褪せており、長年使われてきたその歴史を感じることができる。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「疫病と浮世絵　浮世絵に見る厄災」について解説します。

・　お見舞いにおすすめ

疱瘡は天然痘のことであり、当時は有効な治療方法がなかったことから、流行すると命の危険にさらされました。赤絵と呼ばれる疱瘡絵は、縁起のよい人物や動物などを主に赤一色で摺ったもので、疱瘡にかかった人へのお見舞いに用いられました。菓子袋などにも施され、赤一色のお菓子袋に軽焼きなどをいれて、病児のもとへ持っていったのでしょう。

・　浮世絵にみえる当時の感染症

麻疹に関する浮世絵、通称麻疹絵は、文久 2 年（西暦 1862 年）に大流行した際に多く作られました。麻疹の症状を軽くするまじないや養生法など、描かれた内容は多岐にわかり、当時の状況を物語る資料といえます。

他にもコレラや流行病全般に関して浮世絵作品が残されており、当時の人々が明確な治療法がないなかで、いかにこうした病と対峙してきたかを知ることができます。

ここからは 7 月 27 日（月）までの前期展示の資料です。

・　資料のひとコト説明　人気浮世絵師　お菓子屋さんのために菓子袋を描く

資料名　菓子袋（升太の広告集）　甲州文庫

時代　江戸時代

作者　歌川国芳筆

解説　甲府八日町の菓子屋、升屋太郎右衛門こと升太の広告類が貼られた貼交帳に見られる、浮世絵師の歌川国芳が手掛けた菓子袋。行司の金太郎と、相撲をとる兎とみみずく、達磨が赤色で表されたいわゆる疱瘡絵である。疱瘡絵とは、疱瘡に赤が効くといわれていたことから疱瘡患者に見舞品として贈られた錦絵の一種であり、全体が赤色で摺られている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　ちゃんと薬で治そうね

資料名　妙医甲斐徳本麻疹之来記　甲州文庫

時代　文久 2 年（西暦 1862 年）

作者　歌川芳藤作

解説　おもちゃ絵を得意とし、幕末から明治に活躍した浮世絵師、歌川芳藤の手による大判 2 枚続の錦絵。病は祈祷などではなく、薬を用いて治すようにと医者が諭している。なお、描かれているのは永田徳本という医者で、不確かな部分も多いが、甲斐国に長く滞留したと伝わることから甲斐徳本とも呼ばれた。諸国をまわり治療を行ったといわれている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　さよなら！麻疹の神様

資料名　麻疹送出シの図　三枝家資料

時代　文久 2 年（西暦 1862 年）

作者　歌川芳藤作

解説　麻疹神が手足に斑点をつけた童子の姿として描かれている。御幣が立てられ、鏡餅が供えられた童子は、擬人化した水飴や汁粉など、発病時に食べると良いとされた食物に竹の棒で担がれている。医療事情が整わないなか、人々は流行の終息を神頼みで願うことが多く、本図も江戸の神送り（疫病を外に送り出す呪術的な行事）を描いたもののひとつである。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　地震の後に大儲け

資料名　流行職人尽　三枝家資料

時代　安政 2 年（西暦 1855 年）以降

解説　安政 2 年（西暦 1855 年）の 10 月 2 日に起こった安政の大地震後、鯰絵など多くの風刺画が出回ったが、本図もそのひとつになる。地震後に倒壊した家屋を建て直すため、大工や左官など建築関係の職人が好景気になったことから、それらの職人たちをまとめ番付にしたものである。歌舞伎の番付がごとく、役者のように見えを切る姿で描かれている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　ちょいとそこのひげのお兄さん、遊んでかない？

資料名　治る御代　ひやかし鯰　三枝家資料

時代　安政 2 年（西暦 1855 年）以降

解説　安政の大地震後、11 月 4 日には幕府は火事で焼け落ちた吉原に、仮宅（仮の遊廓）の営業を認めた。本図は「瓢箪鯰（ひょうたんえ　大津絵の画題のひとつで猿が鯰を捉えようとする

図、もとは「瓢鮎図　ひょうねんず」に由来する)」に題材をとったもので、仮宅に現れた鯰が禿と花魁に捕まり、瓢箪に似た鹿島の徳利（とっくり）で押さえつけられてしまった、という内容である。

ここからは、7 月 29 日（水）から 9 月 7 日（月）までの後期展示の資料です。

・　資料のひとコト説明　赤色の菓子袋を持ってお見舞いに行こう
　資料名　菓子袋（升太の広告集）　甲州文庫
　時代　江戸時代
　解説　甲府八日町の菓子屋、升屋太郎右衛門こと升太の広告類が貼られた貼交帳に収められた菓子袋。升屋のマークである升形で囲まれた枠の中に升屋太郎右エ門製と書いてあることから、升太で使われていたことがわかる。疱瘡に赤が効くといわれていたことから、全体を赤で摺り、見舞品の菓子が入れられていたのだろう。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　金太郎の力で伝染病も吹き飛ぶ
　資料名　御菓子袋　上野晴朗氏収集資料
　時代　江戸時代
　解説　金太郎が中央に描かれた菓子袋で、まわしをつけた金太郎が土俵にあがり、しこを踏んでいるようである。金太郎の肌は赤く描かれることが多いが、これは疱瘡除けの意味合いがあるといわれている。他にも桃太郎や源為朝、鍾馗、みみずく、兎、達磨などが疱瘡絵の題材として使われていた。

・　資料のひとコト説明　地震に負けずみんなで乗り越えよう
　資料名　地震後野宿の圖　三枝家資料
　時代　安政 2 年（西暦 1855 年）以降
　解説　安政 2 年（西暦 1855 年）10 月 2 日の午後 10 時頃、のちに安政の大地震と呼ばれる大きな地震が起こった。江戸では多くの家屋が倒壊し、圧死者、焼死者は埋葬された者だけでも約 7 千人におよんだという。本図は倒壊する家や火事から、着の身着のまま逃げ出した江戸の人々が、地震後に皆で集まり野宿をする姿が表されている。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　地震を起こした鯰、島流しになる
　資料名　鯰の流しもの　三枝家資料
　時代　安政 2 年（西暦 1855 年）以降
　解説　恵比寿は神無月（かんなづき）に出雲（いずも）へ行く神々の代わりに留守番をしたこと

から、10 月に起こった安政の大地震関連の鯰絵にはたびたび登場する。本図は留守居役の恵比寿に鯰がつかまり、鹿島大明神（鹿島大明神が要石で地中の地震鯰を抑えていたと信じられていた）のもとに連れていかれ沙汰を受けているところ。鯰を縛っている紐（ひも）が、鯰自身のひげというのが面白い。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　いろんな鯰絵、ご覧あれ！

資料名　鯰絵　三枝家資料

時代　安政 2 年（西暦 1855 年）以降

解説　安政の大地震後、数多く出された鯰絵のひとつで、大判サイズ（約 38 センチメートル×26 センチメートル）の錦絵が 4 つの場面にわかれ、それぞれに異なる趣向の鯰絵が描かれている。鹿島大明神がいないうちに地震を起こすことをもくろみ大工に金をばらまく鯰や、地震によって苦しめられた江戸の町民たちに懲らしめられる鯰などが表されている。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「安政の大地震と鯰絵　浮世絵に見る厄災」について解説します。

・　地底のナマズ

安政 2 年（西暦 1855 年）10 月 2 日の午後 10 時ごろ、大地震が江戸の町を襲いました。その地震の発生後に、爆発的に刊行されたのが鯰絵と呼ばれる風刺画です。普段は要石によって押さえ付けられていた地底の鯰が動き、地震が起こったとの俗信から生み出され、現在 200 種類以上もの鯰絵が確認できます。作者や版元が明記されないものが多いなか、当時の人気浮世絵師たちも作成に関与していたと言われています。

・　鯰絵にみる世相

鯰絵にはいくつか種類があり、要石で鯰を押さえているものや、地震によって仕事が立ち行かなくなった町民たちが鯰を懲らしめるもの、また倒壊した家屋の修理で収益があがった大工や左官と酒盛りをする鯰の絵など、多種多様にわたっています。エスカレートする鯰絵を規制するため、幕府は地震発生から約 2 ヶ月後に版木を没収しますが、こうしたところからも当時大きな社会現象になっていたことが読み取ることができます。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその⑤　エア甲州道中旅行

新型コロナウイルスが人々におよぼした大きな影響のひとつに、「移動の制限」があげられます。海外旅行はもちろんのこと、県境をまたいだ移動も自粛され、「ステイホーム」が求められました。そんななかでも人々は、少しでも旅行やイベントの気分を味わおうと、ステイホームしながら、オンライン上でさまざまな画像・映像を楽しむ

「エア●●」が流行しています。

自粛は緩和されてきたけど、まだまだ思い切り旅行を楽しむような気分にもなれない…このコーナーはそんな皆様のために、博物館の展示で甲州旅行の気分を味わっていただく場として設けたものです。舞台は江戸時代の甲斐国の大動脈である甲州道中。五街道のひとつに数えられ、江戸日本橋から西へ進んで甲斐国に入り、上野原・大月・勝沼・甲府・韮崎などを経て信州下諏訪に至る、全長約 210 キロメートル、甲斐国内だけでも約 100 キロメートルにおよぶ街道です。

まずは旅の下調べと準備から。旅程や旅先の名所・宿泊地を確認して、パスポート（通行手形）の申請も忘れずに。ガイドを頼りにさまざまな名所を見物しながら道中を歩き、旅の終わりに思い出を旅日記として残せば…、江戸時代の旅人たちも顔負けの「エア甲州道中旅行」をお楽しみください。

旅行のステップ１　まずは旅の下調べです。

このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　階段のように示されるこの表の形は、現在も使われています。

資料名　東海道・中山道行程早見表　甲州文庫

時代　文政 13 年（西暦 1830 年）

解説　東海道と中山道の全宿場とその路程について、現在の運賃表のような形式で一目でわかるようにまとめたもの。版元は江戸鶴屋喜右衛門、甲州鰍沢の穀屋紋右衛門の連名となっており、甲州でも頒布されたものと思われる。インターネットで経路検索をするようになるまで、多くの人がこのような運賃・路程表と地図を見ながら旅行の計画を立てていた。

旅行のステップ２　旅先の情報収集をしましょう。

・　資料のひとコト説明　気になる旅の料金情報がわかるガイドブック

資料名　甲州街道　甲州文庫

時代　天保 7 年（西暦 1836 年）

解説　甲州道中内藤新宿から甲府までの宿ごとの路程と馬や人足の料金を記したガイドブック。ほかに甲府から尾州宮（熱田宿）、大山道、富士道、須走～甲府の路程も紹介する。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　旅人が持ち運ぶのに邪魔にならないガイドブックです。

資料名　甲州道中細見記　甲州文庫

時代　嘉永 4 年（西暦 1851 年）

解説　甲州道中を江戸日本橋から甲府まで、甲府から先はそのまま甲州道中を進んで信州へ至る道と、駿州往還を通って身延山、駿河（するが）へ至る道程の宿場や路程、近隣の名所などを記したガイドブック。大きさは 9×19 センチメートル程度とコンパクトで、旅行者が懐にいれ

て用いるポケットガイドのような形で利用されていたのだろう。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　宿や休憩場所の情報は、今も必須のチェックポイントですね。
　　資料名　諸国道中商人鑑　甲州文庫
　　時代　文政 10 年（西暦 1827 年）
　　解説　甲州道中内藤新宿から甲府まで、甲府からは駿州往還を通って身延山に至るまでの道程における、各宿場の旅籠（はたご）や商店を紹介したガイドブック。これもコンパクトサイズで旅行時の携帯用に作られたものと考えられる。

旅行のステップ 3、「通行手形の入手」

・　資料のひとコト説明　庶民の旅の目的の多くは「社寺参詣」でした。
　　資料名　関所通行手形　甲州文庫
　　時代　慶応 4 年（西暦 1868 年）
　　解説　下条西割村（韮崎市）の百姓源兵衛が、大山の石尊権現（神奈川県）へ代参するために発行された通行手形。村名主が源兵衛の身元を保証するとともに、諸国の関所・役人に通行の許可を依頼する形式をとる。

関所通行手形を読み下してみましょう。

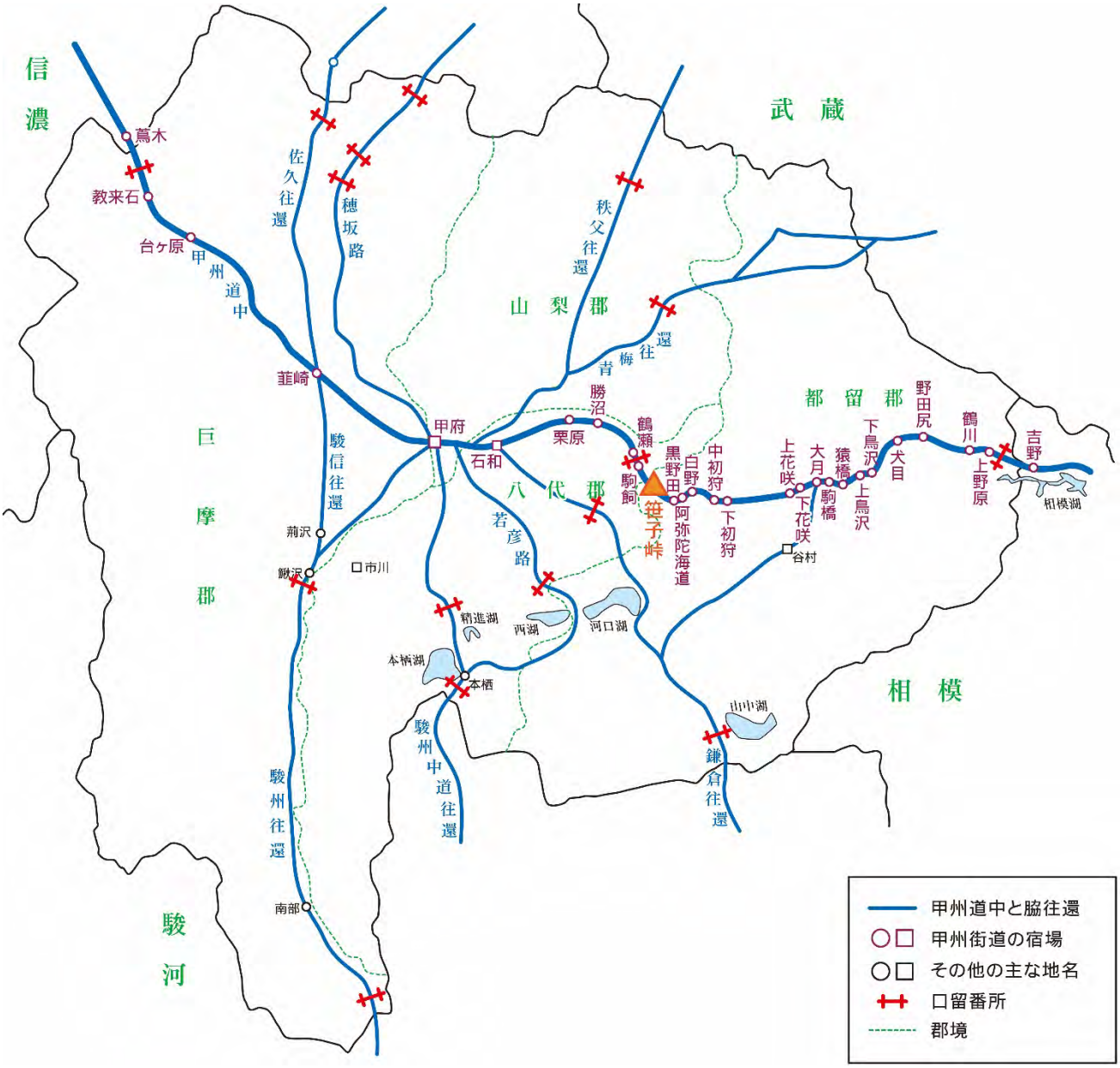
差し上げ申す通り手形のこと。
成澤勘右衛門御支配所甲州巨摩郡下条西割村百姓源兵衛儀、先年より仕来り大山石尊様村内 40 人代参として参慶（参詣）いたし候ものに相違御座無くそうろうあいだ、右このもの儀、道中すじならびに御関所差し支えの無きよう御通し下さるべきよう願い上げ奉りそうろう。念のため、差し出し申す通り手形よってくだんの如し。
慶応 4 年辰 7 月 7 日　成澤勘右衛門御支配所　甲州巨摩郡下条西割村名主庄右衛門（印）・同村百姓源兵衛（印）
国々御関所御役人中

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「甲州道中の宿場・名所・難所」について解説します。

・　甲州道中の宿場
　甲州道中に設けられた宿場は、日本橋から下諏訪までの間に 44 宿、甲斐国内には過半数の 25 宿があります。特に甲斐国東部、北都留郡域（当時は都留郡）に多くの宿があり、現在の上野原市内に 4 宿、大月市内は 12 宿と、大月だけで甲斐国内の宿場の半数近くを占めています。
・　難所笹子峠の名所

大月の西には、甲州道中最大の難所・笹子峠（標高 1096 メートル）があります。ここは険しい坂道が続く難所であるだけでなく、名所「矢立の杉」の所在地としても知られています。樹齢は千年以上といわれ、多くの武士が合戦に臨む際にこの木に矢を射かけて戦勝祈願をしたと伝えられます。高さは途中で折れているものの 25 メートルを超え、目通り幹囲は 9 メートルにおよぶ巨木で、葛飾北斎（かつしかほくさい）や二代歌川広重（うたがわひろしげ）ら有名絵師たちも、その大きさを際立てて描いています。

こちらは江戸時代の主な街道図です。



旅行のステップ４、「旅と宿場」です。

・　資料のひとコト説明　甲府町方の役人が公務で旅行する際の行程です。
　　資料名　先触状　甲州文庫

時代　江戸時代
解説　甲府勤番支配滝川利雍の配下が甲州道中の宿場に対して、甲府町年寄坂田氏が年始の挨拶を終えて江戸から甲府へ戻る際の移動に用いる人足・馬の数を事前に通知した文書。坂田氏は3泊4日の行程で、八王子・猿橋・勝沼に宿泊する予定となっている。

先触状を読み下してみましょう。

覚え
一つ　人足5人、内　長持ち2人、駕籠3人、一つ、軽尻馬1疋、右は甲府町年寄坂田与一左衛門年始御礼のため罷り出で、あい済ましそうろうに付き、来たる9日あかつき7時江戸おもて出立いたしそうろうあいだ、書面の人馬、宿々において遅滞無く差し出し申すべくそうろう。この先触れ、甲府与一左衛門宅へあい届けたまうべくそうろう。以上
正月8日　瀧川長門守内　児玉新左衛門（印）　内藤新宿より甲府まで　宿々問屋中　年寄
泊り　9日　八王寺（ママ）宿、10日　猿橋宿、11日　勝沼宿
右の通り申し付け置きたまうべくそうろう。以上

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　台ケ原は現在も宿場の風情が残る町のひとつです。
資料名　台ケ原宿絵図　甲州文庫
時代　寛政8年（西暦1796年）
解説　台ケ原宿（北杜市白州町）の責任者である問屋・年寄が提出した宿場の絵図。簡素ながら、黒印地や本陣、高札場・橋などの公的施設が描かれており、宿場の基本的な構造がわかる。台ケ原宿は甲州道中成立以前から交通の要地として機能しており、江戸時代後期には本陣と14軒の旅籠を中心に150軒余の家が並び、宿泊・輸送業務を担った。

続いて長い絵図があります。「甲州道中分間延絵図（こうしゅうかいどうぶんけんのべえず）」です。最初の巻には台ケ原宿付近、次のケース内には甲府城下町付近のようすが描かれています。（ただし、展示替えを行いますので、7月29日以降は場面が変更になります。）

・　資料のひとコト説明　江戸時代の最も精巧な道中絵図のひとつ
資料名　甲州道中分間延絵図（写本）
時代　江戸時代（19世紀）か
解説　文化3年（西暦1806年）、江戸幕府の道中奉行所が実地測量に基づき製作した「五街道分間延絵図」（重要文化財・東京国立博物館蔵）のうち、甲斐国内の甲州道中分を正確に模写したもの。上野原から中初狩、白野から一町田中、石和から竜王、韮崎から教来石（きょうらいし）の4巻からなる。（※前期6月17日から7月27日まで・後期7月29日から9月7日までの期間で展示場面替え）

旅行のステップ5は「旅の思い出を残す」です。

・　資料のひとコト説明　名所だけでなく、甲州のさまざまな文物を描いた貴重な記録です。

資料名　並山日記（写本）　若尾資料

時代　嘉永3年（西暦1850年）成立

解説　江戸時代の国学者黒川春村が、甲斐国に滞在した際に記した絵入りの旅日記。甲州道中を通って甲斐に入り市川大門に滞在、鰍沢・身延山を経て東海道で江戸へ戻っている。国内の寺社や旧家を巡り、宝物や祭礼などを丹念に調べて記録している。（※前期・後期で展示場面替え）

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　甲州のさまざまな名所が詳細に描かれています。

資料名　甲中遊記

時代　江戸時代（19世紀）

解説　江戸から甲斐国までの旅程と、甲斐国内のさまざまな名所などを遊覧した際の絵入りの記録。一部に、本草（ほんぞう）学者渋江長伯（しぶえちょうはく）が文化6年（西暦1809年）に甲斐を訪れた際の紀行文『官遊紀勝』と類似する描写がある。（※前期・後期で展示場面替え）

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　仕事であっても、旅を楽しむことは忘れない。そんなゆとりを持ちたいものです。

資料名　升屋の道中日記　甲州文庫

時代　安政4年（西暦1857年）、明治3年（1870年）

解説　甲府八日町の菓子屋の大店、升屋に関わる旅の記録。行程や費用の内訳などを記している。升屋の江戸・東京への旅は商売が主目的ではあるが、その際にも名所見物や社寺参詣をしていたことがわかる。

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその⑥　近世甲斐国の書蹟

筆文字が書かれた掛け軸。こうした資料を書蹟（しょせき　書跡）と呼びます。ここでご紹介しているのは、江戸時代の甲斐国ゆかりの著名人たちの書蹟です。

文字を目の前にすると、私たちはどうしても「何が書かれているのか」、「誰が書いたのか」、「どういう意味なのか」を気にしてしまいます。もちろんそれも大切なことですが、「どのように書かれたか」、つまり「書きぶり」を意識すると、奥深い書蹟の世界が見えてきます。

書蹟は、知人のお祝いなど、何かを記念して書かれることがあります。自作の詩や、過去の有名な作品の一部を書いて、他の誰でもない自分が贈ったもの、いわば自分の分身として渡します。書蹟を贈られた人は、書いてくれた人が筆をとっている姿を思い浮かべながら、その書蹟を見ているのです。

筆の運びを想像しながら、どのように書かれたのか、その勢いや柔らかさ、あるいは文字の並べ方など、「書きぶり」を想像してみましょう。次の一画に移るときに、筆を紙から離すのか、つけたままなのか、リズムはどうなのか、手を動かしながら想像してみましょう。内容や意味から離れて、文字そのものの「書きぶり」を味わえば、書蹟をより楽しく見ることができるでしょう。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「幅広い学問に多くの師匠 一生続く師弟関係」について解説します。

・　学問の幅広さ

江戸時代、学問を修める際には、何人もの師匠について、多様な学問を幅広く学ぶことが普通でした。例えば加賀美光章（かがみみつあき）は、神主（かんぬし）の養子となったことから神道（しんとう）を学ぶために京都に出ますが、その他にも国学や儒学、和歌、有職故実（ゆうそくこじつ）、天文・暦学などをそれぞれの師匠に学んだのち、郷里に戻って私塾である環松亭（かんしょうてい）を開きました。

・　師匠と弟子

光章には千人を超える弟子がいたといわれますが、その弟子たちの多くにも他に師匠がいました。光章の弟子のなかでも最も著名なのが山県大弐（やまがただいに）でしょう。大弐は光章のほかに五味釜川（ごみふせん）にも弟子入りし、儒学や医学などを学びました。また大弐が明和事件（めいわじけん）にて処罰されると、師匠である光章も処分されてしまいます。このように、師弟関係は一生の間続き、弟子に不行跡があると師匠もその責任を負い、弟子は師匠に頭が上がらないという、親分と子分のような関係を持っていました。

このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　皇族らしい、線が細く、やわらかな筆さばき

資料名　八宮良純法親王（はちのみやりょうじゅんほっしんのう）色紙　甲州文庫

時代　江戸時代（17 世紀後半）

解説　八宮良純法親王(はちのみやりょうじゅんほっしんのう　西暦 1603 年生まれ 1669 年死去)が、漢詩と和歌を書き付けたもの。良純法親王は、後陽成天皇の第 8 皇子。寛永 20 年（西暦 1643 年)、突如として甲斐国に配流され、湯村（甲府市）など国内を転々とした。万治 2 年(西暦 1659 年)には許されて帰洛し、寛文 9 年(西暦 1669 年)に 67 歳で亡くなった。漢詩は『和漢朗詠集』に収められた 源順作のもの、和歌は『伊勢物語』から抜粋したもので、ともに松に例えて長寿を寿いでいる。

八宮良純法親王（はちのみやりょうじゅんほっしんのう）の色紙にはどのようなことが書いてあるのでしょう。

十八公の栄は霜の後に露われ、一千年の色は雪の中に深し
われミても　久しくなりぬ　住よしの　きしの姫松　いく世へぬらん

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　深呼吸して、気分すっきり！
　　資料名　加賀美光章（かがみみつあき）書蹟　甲州文庫
　　時代　江戸時代（18 世紀後半）
　　解説　加賀美光章(かがみみつあき　西暦 1711 年生まれ 1782 年死去)の書。光章は江戸小石川に生まれ、下小河原村（甲府市）の山王権現社（日吉神社）の養子となったのち、京都へ遊学し、神道や国学を修めた。甲斐に戻って環松亭という塾を開くと、千人を超える門弟を集めたという。本資料では「腹中の悪い気を吐き出し、清新の気を吸い込むと、何もないところから物事がわかるようになる」という意味の文言を記している。

加賀美の書蹟を読んでみましょう。

風を吐納して、遽く物無くして露を生ず

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　勢いがあり、鑑賞性が高いすぐれた書蹟
　　資料名　志村天目（しむらてんもく）書蹟　甲州文庫
　　時代　江戸時代（18 世紀後半）
　　解説　志村天目(しむらてんもく　西暦 1746 年生まれ 1817 年死去)の書。天目（てんもく）は八代郡末木村（笛吹市）に生まれ、加賀美光章（かがみみつあき）に学んだ。江戸に出て手島堵庵（てしまとあん）に心学を学び、郷里に戻って心学を講じた。本資料に書かれているのは、『文選（もんぜん)』に収められた魏の曹植（そうしょく）による「贈丁廙（ていいにおくる)」という漢詩の一部で、「善行をなせば見返りとして必ず良いことがあり、栄えたり廃れたりはたちまちに入れ替わる」という意味である。

志村の書蹟を読んでみましょう。

善を積めば余慶有り、栄枯立ちどころに須つべし　天目源益之書

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　印鑑でおなじみの篆書体は最も古い漢字のかたち

資料名　辻孔夷（つじこうい）書蹟　甲州文庫
時代　江戸時代（18 世紀後半）
解説　辻孔夷（つじこうい　生没年不詳）の書。孔夷は甲府三日町の二文字屋三枝家に生まれ、八日町の麻屋奥村家に養子に入った。五味釜川（ごみふせん）や加賀美光章（かがみみつあき）の門弟となり、儒学や国学を修めた。能書家として知られている。本資料では「堪忍」の 2 文字を篆書体で記しており、一画一画を微妙なバランスで配置することで、画面を成立させているあたりに孔夷の力量がうかがえる。

辻の書蹟には「堪忍」と書いてあります。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　70 歳おめでとう！　長生きしてね
資料名　小野通仙（おのつうせん）書蹟　甲州文庫
時代　天保 13 年（西暦 1842 年）
解説　小野通仙(おのつうせん　西暦 1804 年生まれか　1888 年死去)の書。通仙は浅尾新田村（北杜市）の医者の家に生まれ、甲府勤番医の宇佐美通義・久甫、伊豆の肥田春安の下で医術を学び、漢方と蘭方の折衷医術を身につけた。弟に画家の三枝雲岱（さえぐさうんたい）、息子に医者の小野泉や英文学者の永峰秀樹がいる。本資料は 70 歳を迎えた知人に対し、「與山石斉寿」、

山や石などと同じくらい長く生きてほしい、という五文字を与えたもの。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　花が咲き、月が照らし、思わず詩作にふけってしまう夜の情景

資料名　松井渙斎（まついかんさい）書蹟　甲州文庫

時代　江戸時代（19 世紀半ば）

解説　松井渙斎(まついかんさい　西暦 1806 年生まれ 1854 年死去)の書。渙斎（かんさい）は江戸の旗本の家に生まれ、高室村（たかむろむら　甲府市）に移住し、西花輪村（中央市）の時習館（じしゅうかん）で教鞭をとった。その後西野村（南アルプス市）に松聲堂が開かれると初代教授となった。門人に広瀬元恭（ひろせげんきょう）や小野泉などがいる。本資料では夜の庵で詩情にあふれるなかで、酒を飲みながら歌う、という隠者の理想の姿が詠まれている。

松井の書蹟を読み下してみましょう。

花は今朝（こんちょう）におよんでくだけ、月は此のゆうべに当たってまどかなり、
書楼の遠水は明らかにして、野樹（やじゅ）の晴煙（せいえん）はあわし、
琴操（きんそう）よろしく隠を招くべし、詩情は禅に入るに似たり、
欄によりて共に吟賞（ぎんしょう）す、尊酒（そんしゅ）細風（さいふう）の前

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　一画一画が丁寧に書かれ、筆者の几帳面な性格がうかがえる

資料名　乙骨耐軒（おっこつたいけん）書蹟　甲州文庫

時代　弘化 2 年（西暦 1845 年）

解説　乙骨耐軒（おっこつたいけん　西暦 1806 年生まれ 1859 年死去)の書。耐軒（たいけん）は江戸に生まれ、幕臣乙骨（おっこつ）家の養子となり、昌平坂学問所で学んだのち、同所の助教を務めた。天保 14 年(西暦 1843 年)、徽典館（きてんかん）が再編整備された際、友野霞舟（とものかしゅう）とともに学頭に就任し、甲府に赴任した。その後江戸に戻り、天守番などを務めたのち、54 歳で亡くなった。本資料は耐軒（たいけん）が数えで 40 歳のときの作であり、春の月夜に望楼から周囲を見渡した風景を詠んでいる。

乙骨（おっこつ）の書蹟を読み下してみましょう。

得月楼開いて緑蕪（りょくぶ）をみおろす、郭南（かくなん）の阡陌（せんひゃく）膏腴（こうゆ）足る、
游閑（ゆうかん）の暇日時（かじつじ）は須らく有るべし、好事の風流必ずしも無くんばあらず、
ただ倹と勤と一世に非ず、貧を共にして利を分かつは果して良図（りょうと）、
何ぞ当に句を題して試みに相い訪い、擔際（たんさい）の姮娥（こうが）一呼（いっこ）をいるべき

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　くずし字のお手本のように整っていながら勢いのある書
資料名　浅野長祚（あさのながよし）書蹟　甲州文庫
時代　文久元年（西暦 1861 年）
解説　浅野長祚(あさのながよし　西暦 1816 年生まれ 1880 年死去)の書。長祚（ながよし）は上級旗本の家に生まれ、書を杉浦西涯らに学んだ。天保 13 年(西暦 1842 年)に甲府勤番支配に就任し、翌年には徽典館（きてんかん）の再編整備をおこなって、乙骨耐軒（おっこつたいけん）らを教授として招いた。江戸に戻ってから要職を歴任したのち、慶応 3 年(西暦 1867 年)に隠居した。本資料は元（げん）の趙孟頫（ちょうもうふ）の「天冠山題詠詩」のうち「雷公岩」という漢詩の一部で、激しい雷雨の情景を詠んだもの。

浅野の書蹟を読み下してみましょう。

雷公（らいこう）臥龍（がりょう）をたたし、国の為に霖雨（りんう）をなす、飛電（ひでん）は金蛇（きんだ）を掣（せい）するも、其れ誰か敢て余を侮らん

次のコーナーに行きましょう。

展示コーナーその⑦　山梨流　災いの防ぎ方

山梨県内では、小正月（こしょうがつ）を中心に道祖神祭りが行われています。道祖神（どうそじん）は村境に祀られ、災いを塞ぎ止める神とされています。

道祖神（どうそじん）には、厄病神と関連づける伝承があります。例えば、厄病神が道祖神（どうそじん）を訪れ、厄を授ける人を記した帳面を預けていくという伝承は山梨県内でも見られ、祭りの時に帳面を飾る習俗も伝えられています。道祖神（どうそじん）とともに疱瘡（ほうそう）神（天然痘を流行させる神）を祀る例もあります。市川三郷町黒沢大木では石造物の疱瘡（ほうそう）神を祀り、道祖神（どうそじん）祭りではその神殿も作ります。道祖神（どうそじん）と厄病神とは相反するようでありながら、実は強く結びついているのです。このような性格は、古くは 11 世紀の『本朝法華験記（ほんちょうほっけげんき)』に見られ、老人の道祖神が厄神に使役される存在として著されています。

このほか、祭りを止めると火事になる、災いを招くという伝承も見られます。道祖神は村を守るだけでなく、扱いによっては災厄を起こす厳しく恐ろしい一面も持つと考えられていたようです。

災厄をくい止めるために、山梨の人々は荒ぶる神を境界に祀り続けてきました。年中行事として受け継いできた先人たちの想いは、今の私たちだからこそ実感を持って受け止めることができるのではないでしょうか。

村に災い
守る神様で

このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　村に災いが入らないのは、道祖神のおかげです。

資料名　山梨市市川（いちがわ）地区のオコヤ

製作者　山梨市市川（いちがわ）第三班のみなさん

製作年　平成 17 年（西暦 2005 年）

解説　市川（いちがわ）地区では小正月（こしょうがつ）の道祖神（どうそじん）祭りの時、集落内の道の分岐点にオコヤ（お小屋）を立てている。市川（いちがわ）には、道祖神（どうそじん）と厄神の伝承がある。それによれば、道祖神（どうそじん）祭りの前に厄神がオコヤの前を通りかかる。道祖神（どうそじん）は正面の窓から手を出して厄神を捕まえ、そのまま閉じ込め、ドンドンヤキの火で一緒に焼いてしまうのだという。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　道祖神（どうそじん）祭りは続けなければなりません･･･!

資料名　「道祖神（どうそじん）祭礼再開願」

製作者　馬場組（現在の山梨市牧丘町西保下馬場）

時代　天保 11 年（西暦 1840 年）

解説　若者たちが道祖神（どうそじん）祭りを華美におこなったことから、7 年間にわたり道祖神（どうそじん）祭りの実施を禁止されていた馬場組が、祭りの再開を願い出たものである。道祖神（どうそじん）祭りが多くの村でおこなわれていたことや、祭りの中断が災いを招くと考えられていたことがわかる。道祖神は村を守るだけではなく、祀らない者に災厄をもたらすという荒ぶる神の側面も持ち合わせている。

この「道祖神（どうそじん）祭礼再開願」を読み下してみましょう。

【「道祖神祭礼再開願」の読み下し文】

恐れながら書付を以て御愁訴申し上げ奉り候

山梨郡西保下村上組の内馬場組、百姓三右衛門ほか弐拾人惣代喜左衛門・安兵衛、申し上げ奉り候、私ども組の内道祖神祭礼の儀、去ル天保四巳年以来御差留めに相成り相慎み罷り在り候処、道祖神祭礼の儀は、一国中の儀、当御領地内にも相止め罷り在り候は、私村方に限り、右は不吉を相招き候様に相心得、神慮にも相叶い申さざる哉と一同心痛仕り候間、恐も顧みず御愁訴申し上げ奉り候、何卒、格別の御慈悲を以って、幼年のものどもに成とも質素に祭礼執行相成り候様、仰せ付けられ下し置かれ度、願い上げ奉り候、右願の趣、御聞済し成し下し置かれ候はば、広太の御仁恵と有り難き仕合わせに存じ奉り候、以上

子正月十五日　　山梨郡西保下村上組の内　馬場組百姓三右衛門ほか二十人惣代　喜左衛門

同断　安兵衛

右差添人名主　伝左衛門

八幡御役所

次のコーナーに行きましょう。壁面いっぱいに水が溢れた街並みの写真が広がっています。

展示コーナーその⑧　危機のなかの山梨

私たちは、新型コロナウイルスの感染拡大という危機を経験しつつありますが、よく参考とされる約100年前のスペイン風邪の際には、数次の流行の波がやってくるなかで山梨県民の約半数が罹患し、数千人の死者が出るという被害を受けました。

近代以前には、いまだ克服されていない結核（けっかく）をはじめ、天然痘（てんねんとう）、コレラ、赤痢（せきり）などさまざまな感染症が社会の脅威となっており、山梨県には日本住血吸虫症（にほんじゅうけつきゅうちゅうしょう　地方病）とのたたかいもあり、人々はたびたび広がる疾病に対して、常に立ち向かっていたのだといえるでしょう。疾病以外にも、自然豊かな山梨県には自然にまつわる災害も多く、近世以前には富士山の噴火があり、通史的には大きな水害がたびたび発生し、多くの生命財産が失

われています。昭和 41 年（西暦 1966 年）の台風 26 号に関わる災害（死者・行方不明 170 名超）以後、山梨県では数十名以上が犠牲となる自然災害は発生しておらず、地域的な記憶や知見が薄らいでいることが危惧されます。

山梨県を襲った大きな地震は、嘉永 7 年（西暦 1854 年）の安政東海・南海地震までさかのぼります。災害と対応する人々の記録は、私たちが直面したときに頼りとなる有用なデータとなります。危機のなかの山梨で、どのような取り組みがあったのか、みなさんのお住まいの地域に引き付けて考えてみてはいかがでしょうか。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「地震で改元（嘉永から安政へ）甲州も大被害を受けた東海地震」について解説します。

・　安政東海・南海地震の被害

嘉永 7 年（西暦 1854 年）11 月 4 日に安政東海地震が、その翌日に安政南海地震が発生します。いわゆる南海トラフ地震で、山梨でも震度 6 から 7 程度の揺れに見舞われ、しばらく余震が続いたとされます。当時の資料をみると、甲府から南方にかけて家屋倒壊がはなはだしく、市街地でもお湯や水が湧きでて、郊外では液状化、川の近くでの地盤沈下などが記録されています。

このコーナー最初の資料です。

・　資料のひとコト説明　甲州の古い地震の記録を載せた、数少ない貴重な資料です。

資料名　歳云録（さいうんろく）　若尾資料

時代　大正 6 年（西暦 1917 年）写し

解説　江戸時代の見聞録として、甲州における安政東海・南海地震の被災状況を記しているほか、それ以前の元禄・宝永・天明の地震についても、被害に関する伝承が記録されている。資料標題には「抄」と付けられており、若尾家による県志編纂事業でおこなわれた資料調査で作成された部分的な写しと思われる。

次の資料です。

資料のひとコト説明　甲府盆地の南西方向に被害が集中して起きています。

資料名　甲府大地震之記　甲州文庫

時代　安政元年（西暦 1854 年）

解説　嘉永 7 年（西暦 1854 年）11 月 4 日・5 日に立て続けに発生した安政東海・南海地震の際の、甲府をはじめとした甲州各地の被災状況の記録。続く余震や多数の倒壊家屋、お湯や水、泥水の湧出、「ゆり込み」と呼ばれる地盤沈下など、さまざまな被害が記録されており、今後南海トラフ巨大地震が発災した場合の本県の災害の方向性を見ることができる。

この「甲府大地震之記」の一部分を読んでみましょう。

甲府地震之覚

一つ　嘉永 7 年寅 11 月 4 日朝五ツどき大地震、市中一統大騒動、潰れ家潰土蔵あまたこれ有り、別して八日町 1 丁目魚町 2 丁目 3 丁目柳町 2 丁目 3 丁目大損の建家は勿論、土蔵などは無事なるものひとつもこれ無く、前代未聞の大変にそうろう。右同日夜までに 36 度ばかりも震え申しそうろう、翌 5 日も同様夕さるの下刻またまた余程の大地震（続く）

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　常設展示パート 1 の「共生する社会」に関連する映像があります。

資料名　26 号台風災害記録アルバム

時代　昭和 41 年（西暦 1966 年）

解説　山梨県に戦後最大の被害者（全県下で死者・行方不明者が昭和 34 年の台風 7 号の 90 名を大きく上回る 175 名に達した）をもたらした、昭和 41 年 9 月の台風 26 号による被災状況を撮影したアルバム。来年で災害後 50 年を迎えるが、集中豪雨が増加している今日であればこそ、災害の実態を振り返るべきときではないだろうか。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　大変な脅威が近づいているとき、心にも効く処方箋が必要です。

資料名　疫病除守札　甲州文庫

時代　江戸時代

解説　安政 5 年（西暦 1858 年）のコレラや天然痘（てんねんとう）など、流行病感染拡大期に多く出回った守り札。多くの民間療法的な予防法がみられたように、原因が定かではない病に対して、人々は藁をもすがる思いで守護を求めたのではないか。

ここで「かいじあむ＋のポイント！」、「人々に立ちはだかったさまざまな感染症」を解説します。

・　多くの伝染病

人類の脅威となる数々の感染症ですが、かつては「伝染病」との呼ばれ方が一般的だったと思われます。わが国でも近世から近代にかけては天然痘（てんねんとう）やコレラの大流行がありましたが、種痘（しゅとう）の普及で天然痘（てんねんとう）が大きく減少した一方で、明治時代に顕著な被害を出した伝染病に赤痢（せきり）があります。山梨県における赤痢（せきり）は、明治 30・31 年（西暦 1897 年から 1898 年）の流行が大きく、山梨県だけで両年とも 2 千名を超える死者をだしました。この明治 30 年には伝染病予防法が制定され、こうした疾病に対する防疫がおこなわれるようになりました。

・　山梨における「スペインかぜ」

今回の新型コロナ禍のなかでよく触れられる 100 年前の「スペインかぜ」ですが、これは毒性の強いインフルエンザウイルスで、全世界で 2 千 5 百万人、わが国だけでも約 38 万人が死亡しています。山梨

県では全体で約 25 万人がかかり、大正 7 年（西暦 1918 年）から翌年春にかけての第一波の流行で約２８００人、同 8 年から 9 年にかけての第二波の流行で約 2200 人が亡くなりました。当時の山梨県の人口が約 58 万人なので、半分以上の人が発症し、およそ 100 人にひとりが亡くなった計算になります。

・　地方病から現在

山梨県においては日本住血吸虫症（にほんじゅうけつきゅうちゅうしょう　地方病）の流行もあり、大正時代の県の報告書には、地方病は結核に次ぐ死者を出していると記されています。山梨県は長いたたかいの末に、この病気の流行を終息に漕ぎつけましたが、言わば感染症（伝染病）と長く関わり、それを止めることができた歴史とノウハウを持つめずらしい自治体とも言えます。感染症の脅威にさらされる今日、いまなにが出来るのか、実は身近な山梨の歴史にそのヒントがあるのかもしれません。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　ヨゲンノトリが出現したとされるのもこのコレラの流行時です。

資料名　此節流行病救法（このせつはやりやまいをすくうほう）　甲州文庫

時代　安政 5 年（西暦 1858 年）

解説　安政 5 年のコレラ流行時に流布した予防・対処方法を記したもの。内容はカラシとうどん粉を練ったものを貼るとか、へその両脇にお灸を据えるとか、現在から考えれば非科学的なものばかりだが、これらの民間療法的なものは全国的にみられ、多くの人々が原因の分からない流行病の脅威に対して、切実な対応をしていたことがうかがえる。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　100 年後には貴重な資料になっているかもしれません。

資料名　政府配付の布製マスク

時代　令和 2 年（西暦 2020 年）

解説　令和 2 年（西暦 2020 年）の新型コロナウイルスの感染拡大のなかで、政府から全戸配付がおこなわれている布製マスク。マスクの流通量不足に対応するため、洗って再使用が可能な布製マスクを、1 住所あたり 2 枚を配付することが同年 4 月に決定した。

次の資料です。

・　資料のひとコト説明　山梨にも感染症に長く取り組んできた歴史と努力の積み重ねがあります。

資料名　死体解剖御願　寄託資料

時代　明治 30 年（西暦 1897 年）

解説　明治時代の日本住血吸虫症（にほんじゅうけつきゅうちゅうしょう　地方病）患者の献体願い。西山梨郡清田村（きよたむら　甲府市）の女性が、原因が解明されていなかった同症の原因特定のため、自らの死後の病理解剖を願い出たもの。彼女の遺志もあり、原因である日本住血吸虫（にほんじゅうけつきゅうちゅう）は明治 37 年（西暦 1904 年）に発見されるが、甲府盆地一帯に蔓延したこの疾病の流行終

息が宣言されたのは、平成 8 年（西暦 1996 年）2 月のことである。

この「死体解剖御願」を読み下してみましょう。

死体解剖御願
西山梨郡清田村（番地・姓名など略）
当五拾四年
私義、泰平なる御代に生存すること既に数十星霜を経過するも、もとより無教育なるをもって、いまだかつて君恩の万分の一だも報ぜざるに、一朝病痾（びょうあ）のため、不帰の身とならんには、迷惑至極と存じそうろう。
然るに不幸にも昨明治 29 年 6 月頃より一疾病にかかり悩むこと甚だし。よって早速に某医を迎え診を乞いたるに、病名さえ指示せざるをもって、その後また二三の某医に診を乞いたるに、これまた前同様漠としてひとつもその要領を得ず。
遂に荏苒（じんぜん）時日を経過し、同年 12 月に至るに、病勢は漸々増進するのみにして、すこしも減退せざるゆえ、最後諦めのため、同月下旬貴院の温厚篤実なるご診察を仰ぎ、充分なるご鑑定を得るに、あに図らんや、当地近傍有名なる地方病にして、いまだ病源の発見せざる最も恐るべき疾患なり。
これまで数多の該患者発見するも、病源不明のため十中八九は鬼籍に転ずるの不幸に接したりと。妾事も発病臥床以来、最早ほとんど 1 ヶ年間の久しきにおよぶも、もとより病源不明不治の症なるをもって、如何に先生の百方ご尽力かつご治療を受くるも、日々衰弱を増進するのみにして、到底快復の見込みこれ無きは勿論、不日死亡の不幸に陥るは目前なるをもって、死後は是非とも貴院において解剖なし下され、充分病源ご発見せられ、以後該地方病にかかり悩むところの数多諸氏を助け、医学上永遠に妾の寸志を遺保せられんこと懇願の至りにそうろう。
よって本日をもって、戸主正夫ならびに親族立会連署の上お願い申し置きそうろうなり。
明治 30 年 5 月 30 日
（家族・本人・親属 2 名署名捺印略）
東山梨郡岡部村　保順病院　御中

次のコーナーに行きましょう。かいじあむ＋の最後のコーナーになります。

展示コーナーその⑨　毎日に微笑みを

昔から、疫病などのさまざまな災厄により、人々は繰り返し苦しめられてきました。現在のように科学的に物事が考えられていなかった時代、人々が救いを求めたのは信仰でした。病の流行に救いを求め、日照りが続けば雨を乞う。その祈りの先にあったのは神仏であり、なかでも観音菩薩（かんのんぼさつ）はこの世でのさまざまな災厄を除くものとして、とりわけ多くの信仰を集めてきました。仏・菩薩に性別は無いとされますが、観音菩薩は優しい女性のような姿に作られることが多く、何より穏やかに笑みを浮かべたような表情は、拝む者の心を落ち着かせ、たとえどんなに困難な状況でも最善を尽くそうという、前向きな気持ちを励まし続けてきたのかもしれません。

ここ数か月、新型コロナウイルス感染症のために、外出を自粛するなど気分がふさぎがちな生活を送っておられる方も多いでしょう。そのような時でも、目の前にある仏の表情はどこまでも優しく穏やかです。現代において、科学技術は私たちをあるゆる面でサポートしてくれるようになりました。しかし私たちの心は、現代においても昔と変わらず、優しい菩薩の微笑みにこそ救われているのかもしれません。

かいじあむ＋最後の展示資料です。

・　資料のひとコト説明　この像は１本の桜の木からできている。素材まで気持ちを明るくしてくれる。

資料名　観音菩薩立像（かんのんぼさつりゅうぞう）　安楽寺蔵　笛吹市指定文化財

時代　平安時代（10～11 世紀）

解説　観音菩薩（かんのんぼさつ）は、“現世利益”、この世を生きる私たちの願いを叶えてくれる尊像とされ、昔から多くの信仰を集めてきた。この像は、スラーッと背が高く痩せ型だが、顔は少々下膨れでふっくらとしており、穏やかな表情を浮かべる。よく見ると、耳たぶの厚い立派な耳をしており、私たちの願い事にも、きっと耳を傾けてくれるのではないだろうか。

最後の「かいじあむ＋」、当館のメインテーマ「山梨の自然と人」について解説します。

・　「常設展示パート１」へのご案内

常設展拡大展示「かいじあむ＋（プラス)」をご覧いただき、ありがとうございました。いつもとは異なる切り口での展示となりましたが、お楽しみいただけましたでしょうか。あわせて、常設展示室（パート１）もぜひご覧ください。新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、一部の展示を休止しておりますが、選りすぐりの資料が皆様をお待ちしております。

・　メインテーマ「山梨の自然と人」

山梨県立博物館の展示は、「山梨の自然と人」を基本テーマに、人々の暮らしや他地域との交流など、山梨の歴史と風土について詳しく紹介しています。今回の「かいじあむ＋（ぷらす)」は、この，メインテーマや常設展示を中心として、開館から 15 年間活動して来た積み重ねの成果ともいえるのではないかと思います。いつもの展示も今回の「かいじあむ＋（ぷらす)」も、そしていずれ開催されていく企画展・特別展・シンボル展も含めて、山梨の魅力をこれからも「もっともっと！」お楽しみください。

以上、山梨県立博物館拡大常設展示「かいじあむ＋（ぷらす)」展示解説リーフレット・テキスト版を終わります。

山梨県立博物館　拡大常設展示　かいじあむ＋（ぷらす）　展示解説リーフレット【テキスト版】
令和２年７月 18 日　発行
編集・発行　山梨県立博物館
電話　０５５－２６１－２６３１
〒４０６－０８０１　山梨県笛吹市御坂町成田１５０１－１

無断転載・複製を禁じます。
非売品です。